

# ビビアナ エスピン エクアドル出身の元キリスト教徒

説明：エクアドル人女性によるイスラーム改宗記。

より ビビアナ エスピン

掲載日時 14 Sep 2015 - 編集日時 14 Sep 2015

カテゴリ：[記事](#) > [新改宗者ムスリムの逸話](#) > [女性](#)

私の名はビビアナ エスピンです。私はエクアドル出身の21歳です。

人生には常々、良いときと悪いときがあります。過去について思いを馳せると、ときに沈痛な思いに苛まれることがあります。一般的な家族に生まれること、思いやりのある両親など、自分の過去を変えたいと思うこともあります。はっきりとは分かりませんが、あらゆる物事には理由があるのだと思います。

私の幼少期は非常に困難なものでした。父は暴力的で、母は父に対しても従属的で、家庭は経済的にも苦境にありました。そして他のことも私の兄弟や私自身の精神衛生に問題を及ぼしていました。私の幼少期、母は家で母音や英語の単語などを教えてくれたため、私は早くから学習に長けるようになり、4歳になるまでには学校に通い始めていました。

両親は私をカトリック スクールに入学させました。母は私が神に対して良い信仰心を持つこと、そして良い教育を得ることを望んでいたため、そこを気に入っていました。その学校は私たちが住んでいた都市でも最も優秀な学校の中の1校だったため、父もそこを気に入っていました。彼は見栄っ張りや虚栄心が強かったため、友人たちに私がそこに通っていることを自慢するのが好きでした。

入学当初から、私は他の生徒たちよりも幼かったため、いじめにあいました。彼らからは髪の毛にガムをくっつけられたり、所有物を盗まれたり、お弁当をゴミ箱に捨てられたりと、散々な仕打ちにあいました。

私は一番年下だったので、校長が私の面倒を見てくれるようになりました。休憩時間には他の子供たちと校庭で遊ぶことはありませんでした。その時間中、私は校長室や秘書室で過ごしたものでした。そこはカトリック スクールだったため、教師陣、校長、管理者たちはほぼ全員修道女でした。

私は彼らととても親しくなり、彼らも私を可愛がってくれるようになり、学校の敷地内にあった彼らの家で過ごすことも多くなりました。彼らの家は校舎のすぐ横にあったのです。

私はその年齢で、すでに他の隣人や子どもたちとは大きく異なっていました。

両親は私が8歳のときに離婚しましたが、それは今もこれまでの私の人生の中でも最も悲しくつらい出来事です。閉じられた空間の中でとても長い時間を過ごしていると、私は色々なことを考え始め、答えの見つからないことについても考え巡らせるようになりました。

母はより宗教的になりましたが、同時に私に対して支配的になりました。それは時には良い影響もありましたが、時にはそうではありませんでした。私は常に恐怖 不安 疑念と隣合わせで育ってきました。

私は静かで落ち着いたところ、特に自然の中を好むようになりました。そうした時間だ

けは、一人で過ごすことも苦ではありませんでした。

私はいつも修道女たちと一緒にでした。学校には広大な緑の校庭があり、私はいつもそこに寝そべて空を見上げ、私を包み込む風を感じるのが好きでした。そこでは平和を感じました。

修道女たちは私をとて可愛がってくれ、私も彼女たちといるのが好きでした。家庭の問題からの逃避は、神へのご加護を求めることだけでした。

12歳のとき、私は母に学校の修道院に入り、彼女らと同じ修道女になりたいと告げました。

しかし母は動揺し、私が神の近くに行きたいと思っていることは嬉しいと言ったものの、やがては孫が欲しいことから修道女にはなって欲しくないと言いました。それは学校の最後の年でした。

母からの否定の後、私はバイブルを学習することによって神の近くにあると努力しました。それを意識して読み始めると、そこには多くの事柄が不可解だったり矛盾していたり、一部では不完全な概念さえあることに気付きました。それゆえ、その残りを探す必要性を感じ、それに対する答えは不明瞭で理にかなわないことばかりでした。

私は諸宗教についての本を読み始め、インターネット検索も活用しました。

私はユダヤ教、仏教、不可知論、ヒンズー教、キリスト教の諸宗派についての情報を得ました。それらは何一つとして私の論理を満足させてくれませんでした。イスラームに関しては、悪い話ばかりしか耳にしたことがなかったため、始めから興味を持ちませんでした。しかし結局はイスラームもきちんと調べ、論理的な答えを見つけるための私自身の最終的な答えを探すことにしました。

三位一体論は私にとっては全く不明瞭でした。それゆえ、私がイスラームについて調べ始めたとき、私が抱いていた多くの答えをそこから見つけ出しました。イスラームは理にかなっていませんし、神は唯一であるとクルアーンで繰り返し強調されているよう、神の数についての私の疑問に答えてくれました。それは、私のイエスについての疑問にも答えました。またバイブルが改変されていること、そしてそれが元来の形にはないことを知り、私は遂に真理を発見したと感じました。

私は預言者ムハンマド（神の慈悲と祝福あれ）についても簡潔に読み、彼がモーゼと非常に近いことを知りました。すべての預言者たちが遣わされたものと同じ教えを携えた神の最後の預言者をなぜ信じずにいることができるのでしょうか。それらすべてのことは、私に真の宗教を見つけたことを悟らせました。

はっきりとは覚えていませんが、私が母に宗教を変え、ムスリムになりたいと打ち明けたとき、私は17～18歳でした。彼女には、市街地にあるイスラミックセンターを訪れてより多くのことを学びたいと告げました。母は怒り出し、彼女の家に住めるのはキリスト教徒だけだと言い出し、本気で改宗するつもりなら家を出なさいと言われました。そのため、私はそれが冗談だと言い繕い、その場をしのぎました。

彼女は私の叔母に連絡を取り、叔母は反イスラームの本を持ってきました。その本を読むと怖くなり、頭の中には恐怖や疑念の渦が残されました。それゆえ、私はムスリムに改宗するという考えを止めたものの、元々キリスト教には心地良さを感じなかったため、キリス

ト教に戻る気は起こりませんでした。

母は、彼女の弟に起きた奇跡をきっかけにカトリックから福音派に宗派変えしました。彼は癌を患っており、医者は彼の余生が1週間から1ヶ月と宣告していました。それ以来2年が経ったものの、彼はいまだ健在です。

母が改宗を決断した日、私は既にイスラームについて彼女と話しており、一緒にイスラミックセンターへ行き、あの本からの疑念や恐怖について質問することにしました。あの日の母はとても機嫌が良かったので、彼女はそれに同意しました。それがその日の朝で、夜になると彼女は非常に強い確信と共に福音派として帰宅したため、彼女とイスラームについて会話することはもはや不可能でした。その数カ月後、私はムスリム男性と出会い、しばらくして結婚し、彼とエジプトに引っ越すことになりました。

私の人生の2つの大きな夢にはエジプトに行くこと、そして私のことを心から愛してくれ、思ってくれ、あらゆる女の子が子供のときに夢見るようなロマンチックでチャーミングな王子さまのような良い男性と結婚することでした。しかし、それらの夢が叶うことはないのだと思い込んでいました。なぜなら一方で、私の経済的状況はエジプトへ旅行しそうした男性と出会うことを不可能にさせたからで、またもう一方では私のにとっての理想的な男性は夢の中にしか現れないと思っていたからです。

神は私が望んだものすべてを与えてくれました。しかし正直に言えば、私は与えられたものに感謝しませんでした。

エジプトに来た時も、改宗するかどうかに確信は持てませんでした。私の新しい夫は、学識だけでなく、忍耐と信仰を持ち合わせた素晴らしい女性を紹介してくれました。彼女の名前はラーヤでした。彼女は私の状況を的確に分析してくれ、イスラームへの改宗に関わるすべての疑念や誤解を払拭してくれました。

2009年8月30日の土曜日、私はついにシャハーダをしました。私がシャハーダをしたのは、ただひとえに唯一なる神の存在と、ムハンマド（神の慈悲と祝福あれ）が最後の預言者であるという確信に至ったからです。しかし、私は機が熟したと感じるまでは実践を始めないと宣言しました。彼らは私に同意したものの、当時の私には本格的な学習を始める意図もまだありませんでした。

翌週の月曜日に状況は一変してしまいました。夫と私の関係は、私の不備から深刻な状況に陥ってしまい、彼は私に離婚宣言をしたのです。私の世界はバラバラになってしまった感じがしました。

絶望していた私には、ラーヤ以外に助けを求める人がいませんでした。あの日以来、彼女は私を支援してくれ、実の娘同様の扱いをしてくれていました。

母はいつも、人間は悪いことが起きるまで学ばないものだと言っていました。それは非常に真実をついた言葉であると思います。私の夫に関係するあらゆる問題は、アッラーに助けを請い求め、アッラーのお赦しを求めなければならない必要性を感じさせました。

私はまだスタートラインに立ったばかりの状態ですが、主に仕え、感謝したいと真摯に思っています。私は衣服の着こなしを変え始め、ヒジャーブを着けるようになりました。私は人生のすべてを変えたいと思っています。私は神に、そして愛する夫に、そして自分自身に、私が新しい人物であることを証明したいと思っています。

離婚後、夫は近い将来によりを戻してくれる可能性を匂わせてくれています。神にこそすべての称賛あれ。

今、私は宗教的に真面目になること、そして彼は私を許すまでの時間を必要としています。あらゆる面において、私は年末までに神が私に力をお与えになることを願っています。私は神の決定が何であれ、それを受け入れなければなりません。

それは私の人生を根底から変えた、教訓だったのです。

この記事のウェブアドレス：

<http://www.islamreligion.com/jp/articles/2872>

Copyright © 2006-2015 [www.IslamReligion.com](http://www.IslamReligion.com). All rights reserved.